

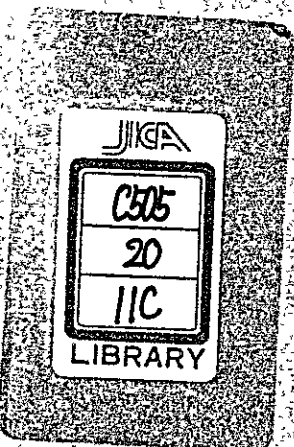
派遣専門家オリエンテーション資料

カメルーン

REPUBLIC OF CAMEROON

任国情報

1992年



国際協力事業団
国際協力総合研修所

JICA LIBRARY



1100797181

24263

国際協力事業団

24263

はしがき

この任国情報は国際協力のために赴任される専門家およびJICA役員等に、任国での生活上必要な事項についての情報を提供するものです。

本書の刊行にあたっては当該国に派遣中の専門家、JICA事務所員、プロジェクト調整員、協力隊調整員とその御家族の多大な御協力を得ました。また、外務省、在外公館、その他関係機関の御好意により、貴重な資料の一部を利用させていただきました。

今後も、本書の内容を一層充実させ、常に、新しい情報の提供に努めたいと考えております。

本書が国際協力の分野で活躍される方々の参考となれば幸いです。

平成 4年11月

国際協力事業団
国際協力総合研修所所長

カメルーン



目 次

I 一般事情

1. 主要指標	1
2. 略 史	4
3. 政治、外交	5
4. 経済事情	7
5. 我が国との関係	9

II 生活事情

1. 食生活	14
2. 衣 料	17
3. 住 宅	18
4. 医 療	20
5. 教 育	22
6. 家庭の使用人	23
7. 交通事情	25
8. 通 信	27
9. マスコミ	28
10. 教養、娯楽、趣味、スポーツ	29
11. その他のサービス	32
12. 観 光	33
13. 治安、緊急時の心得	35
14. 出入国手続および帰国手続	36
15. 私財の輸送、引き取り、購入	39
16. 社 交	42
17. 任国官公庁	43
18. 在外日本関係機関など	44
19. 地方都市	45

フランス語の表記に関して、アクセント記号などは省略しましたので、ご了承下さい。

I 一般事情

1. 主要指標

1-1	国名	カメルーン共和国 Republic of Cameroon
1-2	独立	1960年 1月 1日 (旧宗主国：フランス、イギリス)
1-3	首都	ヤウンデ Yaounde
		人口 64万 9,000人 (1986/87年)
1-4	面積	47万 5,000平方キロメートル (日本の約 1.3倍)
1-5	気候	沿岸地方と南部は高温多湿、北部は高温乾燥、中部はその中間の気候形態である。北部は 7月、8月が乾季であるが、南部はこの時期が雨季であり、南北の気候はまったく対照的といえる。雨量も南部は 4,000ミリを超えるが、北部チャード湖周辺では年間 600ミリ程度である。

表1 ドアラの年間気温・雨量・湿度表

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均気温(℃)	27.1	27.4	27.4	27.3	26.9	26.1	24.8	24.7	25.4	25.9	26.5	27.0
平均雨量(ミリ)	61	88	226	240	353	472	710	726	628	399	146	60
平均湿度(%)	83	82	83	83	85	87	90	90	89	87	86	84

表2 ヤウンデの年間気温・雨量・湿度表

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均気温(℃)	24.1	24.6	24.5	24.3	23.8	23.1	22.2	22.3	23.0	23.0	23.4	23.9
平均雨量(ミリ)	22	163	146	182	204	151	56	74	202	300	127	20
平均湿度(%)	79	77	80	82	85	86	86	86	86	86	84	80

1-6	人口	1,183万人 (1990年)
	人口密度	1平方キロメートル当たり24.9人
	人口増加率	3.2% (1980~89年平均)

- 1-7 人種構成 大別して、南部のバンツー系と北部のスーダン系に分かれ、バンツー系には、ベティ族、パウアン族、ドアラ族、バッサ族などがいる。スーダン系は、フルベ族やコア族など多くの部族を含んでいる。西部地方には、バミレケ族やバムン族といった、起源が不明な大部族も存在する。
 なお、カメルーンの先住民とされているピグミーは、現在では南部の森林地帯に数千人が居住している。
- 1-8 言語 公用語はフランス語と英語である。ほかにバミレケ語などの部族語がある。
- 1-9 宗教 原始宗教50%、イスラム教20%、カトリック15%、プロテスタント15%
- 1-10 政治
- (1) 政体 共和制
- (2) 元首 ポール・ビヤ大統領 (Paul Biya、任期 5年)
- (3) 議会 1院制国民議会。120議席、任期 5年
- (4) 政党 カメルーン人民民主連合 (RDPC)
- 1-11 経済
- (1) GNP 112億 3,300万ドル (1990年)
 1人当たり 940ドル (1990年)
- (2) 主要産業 農業 (コーヒー、ココア、綿花、バナナ、アワ、ソルガム、トウモロコシ、米)、林業 (木材)、鉱業 (石油)、工業 (食品加工、織物、木材加工、セメント)
- (3) 貿易 輸出 (FOB) 17億 2,000万ドル (1991年推定)
 輸入 (FOB) 11億 5,000万ドル (1991年推定)
- (4) 財政 歳入 5,370億 C F Aフラン (1989年度)
 歳出 7,037億 C F Aフラン (1989年度)
- (5) 通貨 通貨単位 アフリカ金融共同体フラン (C F Aフラン)
 為替相場 1ドル=250.1 C F Aフラン
- (6) 外貨準備高 2,600万ドル (1990年)
- (7) 対外債務 60億 2,300万ドル (1990年)
- 1-12 日本との時差 時差は 8時間で、日本の正午はカメルーンでは午前 4時である。
- 1-13 祝祭日
- 1月 1日 新年
- 2月 11日 若人の日
- 4月 13日 聖金曜日
- 4月 26日 断食明け祭日
- 5月 1日 メーデー
- 5月 20日 国民の日
- 5月 24日 キリスト昇天祭

7月 3日 犠牲祭
8月15日 聖母被昇天祭
12月25日 クリスマス

2. 略 史

昔は全土にわたってピグミーの国であったといわれ、古代からエジプト人、カルタゴ人、ローマ人などの来訪があったとも伝えられている。9～15世紀にわたって、北方カメルーンにはかなりの文明をもったサオ王国が栄えたが、その頃スーダン人、バンツー、マカなどの部族によって多方面から侵入を受けた。

15世紀になってまずポルトガル人がこの地を訪れ、次いでオランダ、イギリス、ドイツ、フランスの各国人が次々に渡来、交易でドアラ港が繁盛した。この間、内陸ではブルス、コトコ王国がそれぞれ栄え、一部の部族では文字を発明したものもあったという。このような状況が19世紀の初めまで続き、1884年になってドイツの探検家ナハティガルが、海岸地帯の酋長連とドイツ商人との間の協定を認めたことで沿岸地方はドイツの保護領となった。その翌年から1902年にかけて、ドイツはしだいに内陸を平定、11年にはフランスから代償として土地を獲得してその領域を広げた。

しかし、第1次世界大戦の結果、この地域は一部はイギリス、フランスにより分割統治され、そのほか大部分が国際連盟の委任統治となり、第2次世界大戦後、この区域は国連の信託統治領として引き継がれた。1960年1月にフランスの信託統治地域だったところが独立し、イギリスの信託統治地域の一部と合してカメルーン連邦を結成したが、72年5月の国民投票で、カメルーン連合共和国と称する単一国家として生まれ変わった。

1960年 1月 1日 フランス領カメルーン独立

1961年 2月 1日 イギリスの信託統治地域の一部が人民投票により西カメルーンとなる

同年10月 西カメルーン独立、東西カメルーンの連邦共和国成立

1972年 5月 連邦制を廃し単一国家とし国名を「カメルーン連合共和国」とする

1975年 5月 憲法改定により首相のポスト新設

1982年11月 アヒジョ大統領辞任、ピヤ大統領（前首相）就任

1983年 8月 クーデター未遂事件

1984年 1月 大統領選挙、ピヤ大統領勝利。首相職を廃止。国名を「カメルーン共和国」に改称

同年 4月 クーデター未遂事件

1985年 3月 バメンダにおいて第4回カメルーン国民同盟（UNC）党大会、解散。あらたにカメルーン人民民主連合（RDPC）に改称、第1回党大会

1986年 8月 ニオス湖有毒ガス災害

1987年 6月 経済危機に対処するための緊縮財政措置発表

1988年 4月 大統領選挙、ピヤ大統領再選

3. 政治、外交

3-1 最近の政情

1986年のカメルーン人民民主連合（RDP C）の党下部組織選挙、87年10月の市町村選挙などを通じて、ピヤ大統領は着々とその体制基盤を固め、88年4月の大統領選挙、国民議会選挙における勝利により、よりいっそう政権の基盤強化を確かなものとした。

この間アヒジヨ前大統領は、大統領職を辞任後、主として南フランスに在住していたが、その後セネガルに渡り、1989年11月ダカールで病死したため、ここにアヒジヨ時代は完全にその幕を閉じた。

1989年、東欧諸国で急速に活発化した民主化への動きは、アフリカ諸国においても少なからぬ影響を及ぼし、アフリカ各国で民主化の実現と複数政党制を導入する要望が強くなった。

カメルーンにおいてもこれは例外ではなく、1990年6月末に行なわれたRDP C党大会の決議において、諸政党結成を目的とした措置を早急にとるべきことが述べられ、さらに90年12月に開催されたカメルーン議会通常会期において、政党の設立に関する法律が採択された。

1991年4月、ピヤ大統領は首相制の復活と年内総選挙実施を約束、同25日、経済専門家のハヤトゥーを暫定首相に任命した。

これに対し、反政府勢力は北部バメンダなどで暴動を起こしたため、大統領は5月、11の州のうち7州を軍管理下におくと宣言した。政府は6月、野党間の協力は非合法だと決めつけて対決姿勢を鮮明化した。以来、野党は毎月抗議デモを展開しているが、政党の合法化は順調に進み、6月末までに約30の政党が公認された。しかし、一方で8月には反体制派の約400人が逮捕された。

大統領は10月に、総選挙を1992年2月16日に実施すると発表したが、11月に野党が要求する「国民会議」の開催は拒否すると言明した。11月14日、国民会議にかわる「3者会談」が開かれ、政府、野党・民間団体の代表が参加、憲法改正のための委員会設置などで合意した。

3-2 外 交

カメルーンは、東西いずれの国の影響力も受けず独自の立場を貫くとの理念のもとに非同盟路線を堅持しつつも、友好国との協力の多様化を推進している。

カメルーンと旧宗主国（特にフランス）との結びつきは貿易、経済協力を通じて依然として強いが、政府は同国のフランス語系、英語系各住民への配慮からフランス・アフリカ首脳会議、英連邦首脳会議には参加せず、一步距離を隔てる慎重な立場をとっている。しかし、1989年5月にダカールにおいて開催されたフランス語圏諸国首脳会議に、カメルーンははじめてオブザーバーを派遣しており、今後の旧宗主国との関係の進展が注目される。

カメルーンは旧フランス領赤道アフリカ諸国のひとつとして、ガボン、コンゴ、中央アフリカ、チャード、赤道ギニアなどの近隣国とともに中部アフリカ経済・関税同盟（UDEAC）を形成し、そのなかでも指導的な地位にある。

もうひとつの隣接する大国、ナイジェリアとの関係については、1981年5月、

ナイジェリアとの国境付近でカメルーン憲兵隊によるナイジェリア兵殺害事件をきっかけに両国関係が一時緊張したが、カメルーン側の全面謝罪と賠償支払いにより紛争は表面的に解決した。しかしながら、ナイジェリアはギニア湾上の海境線改定を望んでおり、同地域が産油地帯だけに今後の動向が注目される。

対南アフリカ外交については、カメルーンはこれまでほかのアフリカ諸国と共同歩調をとっていたが、1990年12月、南アフリカの鉱業・エネルギー大臣が中・西部アフリカ諸国（コートジボアール、サントメ・プリンシペ、コンゴ、カメルーン）を訪問した際、カメルーンは同大臣を招待する形をとり、これにより南アフリカの閣僚のカメルーン公式訪問がはじめて実現した。これはカメルーンの従来の反南アフリカの立場からみれば、大きな外交政策の進展である。

中東諸国との関係は良好であるが、パレスチナの国家承認は行なっておらず、またイスラエルとは1986年8月に外交関係再開に踏み切った。なおビヤ大統領の身辺警護にあたる警備兵は、イスラエル人兵士で固められている。

4. 経済事情

4-1 概 観

カメルーン経済は、多様な食糧作物およびコーヒー、ココアなどの輸出用換金作物に恵まれた、農業を基盤とする自由主義経済、開放経済を主体としており、独立以来堅実な農業政策により、高い経済成長率（1980～87年平均、年率8.7%）を維持し、また食糧自給をほぼ達成していることから、「アフリカにおけるサクセス・ストーリー」と評されている。89年度のGDPは3兆3,460億CFAフランで、その内訳は、第1次部門35%、第2次部門20%、第3次部門45%となっている。

しかし、近年の1次産品（コーヒー、ココア、石油）の国際市場における価格低迷により、経済困難に直面したため、1989年5月から世銀、IMFの指導のもとに、中期経済構造調整計画を策定し、財政制度の改革、公企業の再編成と民主化、銀行セクターの改革、主要農産物流通機構の改革、国内および対外商取引の規制緩和などの措置を実施している。

4-2 産 業

(1) 農 業

農業部門（林業、畜産、水産を含む）は全労働人口の70%、輸出総額の55%を占める基幹産業である。（ただし、農地は現在栽培可能な土地の10%にすぎない）

食糧作物としては、マニョック（キャッサバ）、タロイモ、バナナ、トウモロコシなどが生産され、大部分は国内で消費されるが、近年では一部が近隣諸国に輸出されている。主要輸出用農産物は、コーヒー、ココア、綿花などでその生産は安定しているが、これらは国際市場価格の変動に影響されるところが大きく、これがカメルーンに及ぼす経済困難の一因にもなっている。

(2) 鉱 業

主な鉱物資源は石油、天然ガス、ボーキサイト、鉄鉱石などであるが、商業ベースの開発がなされているのは石油と天然ガスだけである。

原油生産は1977年から始まり、同年に80万トンを生産、以後生産量は年々大幅に増加している。89年度の実産量は735万トンで、埋蔵量は8,000万トンと見積もられており、あまり多くはない。

(3) 工 業

カメルーンの製造業は順調に拡大しているが、いまだ小規模である。主要製造業としては、食品加工、タバコ・マッチ、繊維、皮革、木材、家具、アルミニウム精錬、セメントなどがあり、また第4次開発5ヵ年計画の一環としてバルブ、製紙工場の建設を振興している。

4-3 財 政

財政は年々赤字を続けており1989年度の歳出額は7,037億CFAフラン（うち経常支出5,492億CFAフラン、資本支出1,545億CFAフラン）、歳入額は5,370億CFAフランで、1,667億CFAフランの赤字となっている。これらの赤字の多く（半額以上）は、外国からの援助で補填することが期待されて

いる。

1990年度の政府予算(90年7月～91年6月)は5,500億CFAフランで、前年度に比べ8.3%減となった。これは、石油、農産物の輸出価格が伸び悩み、経済が低迷しているためで、IMF世銀の融資で構造調整計画の推進を行なっているにもかかわらず、最近7年間で最低の数字となっている。

4-4 貿易、国際収支

(1) 貿易

最近の貿易額は、アフリカの国ではめずらしく出超が続いている。政府発表の1989年度の輸出総額は5,497億9,652万CFAフラン、輸入総額は4,491億176万CFAフランで1,006億9,476万CFAフランの黒字である。前年同期比では輸出35.4%増、輸入11.6%増、黒字幅は26.9倍にもなっている。

地域別輸出ではEC諸国が輸出総額の68.2%を占め、輸入でもEC諸国からの輸入が輸入総額の66.1%を占めている。前年度比で特に目立ったのは、輸入でECのシェアが30.4%も急増しているのと、輸出入ともフランスのシェアが大幅に伸びている点である。

国別輸出先では、フランスが輸出総額の32.7%で1位、以下、アメリカ、オランダ、イタリア、スペインが上位5ヵ国である。輸入先では、フランスが輸入総額の38.3%で1位、以下、ドイツ、日本、ベルギー・ルクセンブルグ、イタリアと続いている。

商品別では主として石油やココア、コーヒー、綿花などの農産物を輸出し、工業用機械や輸送機械などの工業製品を輸入している。

(2) 国際収支

表1 国際収支 (単位：億CFAフラン)

	1986年度	1987年度	1988年度	1989年度
貿易収支	-30	340	1,490	1,350
役務収支	-3,250	-2,630	-2,170	-2,490
移転収支	-400	-430	-270	-160
資本収支	2,750	960	220	800
誤差脱漏	-970	970	-750	-
総合収支	-1,900	-780	-1,480	-1,540

5. 我が国との関係

5-1 政治、外交

我が国はカメルーンの独立（1960年 1月 1日）と同時に同国を承認した。カメルーン側は88年 1月に大使館を本邦に開設、我が国は91年 4月ヤウンデに大使館を開設した。

5-2 経済、貿易

我が国とカメルーンの貿易は、我が国が輸送機械、電気製品、機械など工業品を輸出し、木材、コーヒー、綿花などを輸入する構造である。1990年の我が国の輸出総額は 4,072万ドル、輸入総額は 999万ドルで、我が国の 3,073万ドルの出超である。前年比では輸出は20.0%減、輸入は50.4%減となっている。近年はカメルーンの経済低迷から貿易規模の縮小が目立ち、ドル・ベースでは87年比で90年は51.1%と半額近くまで落ち込んでいる。

1990年の貿易の特徴をみると、我が国の輸出では輸送機械が 2,776万ドルで輸出総額の68.2%を占めたものの、前年比では22.1%落ち込んでおり、これが輸出総額減につながっている。輸入では89年に 1位を占めたコーヒーが90年には69万ドルにとどまり、前年比93.2%減と大幅減となり、かわって木材が前年の2.47倍の 892万ドルとなり、輸入総額の89.2%を占めるに至った。

表1 我が国の対カメルーン貿易の推移

(単位：1,000ドル)

	1986年	1987年	1988年	1989年	1990年
輸出 (FOB)	102,674	83,261	45,240	50,875	40,722
伸び率 (%)	47.3	▲18.9	▲45.7	12.5	▲20.0
輸入 (CIF)	40,878	15,903	17,907	20,139	9,990
伸び率 (%)	142.0	▲61.1	12.6	12.5	▲50.4
バランス	61,796	67,358	27,333	30,736	30,732

表2 我が国の対カメルーン輸出 (単位：1,000ドル、%)

	1988年	1989年	1990年	構成比	伸び率
総 額	45,240	50,875	40,722	100.0	▲20.0
食料品類	—	—	171	0.4	—
原料品類	198	301	461	1.1	53.2
鉱物性燃料類	464	—	—	—	—
工業製品類	44,523	50,545	40,058	98.4	▲20.7
化学工業品	991	1,699	410	1.0	▲75.9
機械機器類	38,453	41,823	32,878	80.7	▲21.4
一般機械類	5,492	3,659	2,916	7.2	▲20.3
電気機械類	2,135	2,220	1,928	4.7	▲13.1
輸送機器類	30,094	35,651	27,759	68.2	▲22.1
精密機器類	732	293	275	0.7	▲6.0
繊維製品類	101	288	579	1.4	101.1
金属品	2,732	3,839	2,948	7.2	▲23.2
非金属鉱物製品	602	470	388	1.0	▲17.4
その他原料別製品	1,333	1,926	2,682	6.6	39.2
雑製品	311	501	174	0.4	▲65.3
その他・特殊取扱品	56	29	32	0.1	10.8

表3 我が国の対カメルーン輸入 (単位：1,000ドル、%)

	1988年	1989年	1990年	構成比	伸び率
総 額	17,907	20,139	9,990	100.0	▲50.4
食料品類	13,398	10,256	873	8.7	▲91.5
コーヒー	13,398	10,237	694	6.9	▲93.2
ココア豆	—	19	139	1.4	631.6
原料品類	4,487	9,801	9,082	90.9	▲7.3
綿花	1,173	6,004	2	0.02	▲99.97
工業製品類	2	51	33	0.3	▲35.1
繊維製品	—	2	—	—	—
金属品	—	49	31	0.3	▲37.3
雑製品	2	—	—	—	—
その他・特殊取扱品	20	32	2	0.02	▲93.8
再輸入品	20	32	2	0.02	▲93.8

5-3 経済・技術協力

我が国は、カメルーンの1人当たりのGNPが比較的高い水準にあったことから、インフラ整備に対する有償資金協力および研修員受入れなどの技術協力を中心に援助を実施してきたが、1990年度から一般無償供与対象国に移行したことから、無償資金協力が拡充されている。また、88年度以降、毎年度文化無償援助を実施している。

表4 我が国のODA実績

(支出純額、単位：100万ドル)

暦年	贈与			政府貸付		合計
	無償資金協力	技術協力	計	支出総額	支出純額	
86	3.51(72)	1.34(28)	4.85(100)	—	—(—)	4.85(100)
87	0.41(3)	0.41(3)	0.82(7)	11.68	11.68(93)	12.50(100)
88	—(—)	0.72(83)	0.72(83)	0.16	0.16(18)	0.87(100)
89	1.68(78)	0.47(22)	2.15(100)	—	—(—)	2.15(100)
90	2.95(63)	1.22(26)	4.18(89)	0.51	0.51(11)	4.69(100)
累計	11.82(39)	5.95(20)	17.78(59)	12.35	12.35(41)	30.12(100)

(注) カッコ内は、ODA合計に占める各形態の割合(%)。

表5 年度別・形態別実績

(単位：億円)

年度	有償資金協力	無償資金協力	技術協力
1985年度 までの 累計	35.88億円 道路開発計画 (82年度：35.88)	13.90億円 食糧増産援助 (80年度：2.50) 地下水開発計画 (83年度：5.40) 内水面漁業振興計画 (85年度：6.00)	3.41億円 研修員受入れ 23人 調査団派遣 40人 機材供与 4.2百万円 開発調査 1件

(以下次ページに続く)

(単位：億円)

年度	有償資金協力	無償資金協力	技術協力
1986年度	60.00億円 ドアラ港コンテナターミナル近代化計画 (60.00)	0.52億円 災害緊急援助(有毒ガス被害) (200万フラン=0.52)	0.94億円 研修員受入れ 7人 専門家派遣 14人 調査団派遣 7人 機材供与 20.8百万円 開発調査 1件
1987年度	なし	なし	0.32億円 研修員受入れ 8人 調査団派遣 6人
1988年度	なし	6.59億円 地下水開発計画(6.20) 青年スポーツ省に対する体育機材 (0.39)	0.42億円 研修員受入れ 6人
1989年度	なし	0.39億円 国立ヤウンデ大学に対する語学教育用機材 (0.39)	0.43億円 研修員受入れ 9人 調査団派遣 13人 開発調査 1件
1990年度	なし	8.58億円 食糧等貯蔵倉庫建設計画(1/2期) (6.10) 食糧増産援助 (2.00) カメルーン・ラジオ・テレビ局に対する教育番組および番組制作機材 (0.48)	1.49億円 研修員受入れ 8人 調査団派遣 14人 機材供与 6.2百万円 開発調査 1件

(単位：億円)

年度	有償資金協力	無償資金協力	技術協力
1990年度 までの 累 計	95.88億円	29.98億円	7.01億円 研修員受入れ 61人 専門家派遣 14人 調査団派遣 80人 機材供与 31.3百万円 開発調査 2件

- (注) 1) 「年度」の区分は、有償資金協力は交換公文締結日に、無償資金協力および技術協力は予算年度による。
- 2) 「金額」は、有償資金協力および無償資金協力は交換公文ベースに、技術協力はJICA経費実績ベースによる。

II 生活事情

1. 食生活

1-1 食料

(1) 一般事情

現地の人の食生活は、地方、部族により種々異なるが、日本人としては 2～3軒のスーパーマーケットから購入することとなり、ヤウンデで独立家屋に居住する人は家庭菜園が大きな役割を果たすであろう。ヤウンデは高度 800メートル程度のため、キャベツ、白菜、にんじん、大根、やまいも、さといも、さつまいも、ショウガ、三つ葉、ネギ、小松菜、パセリなどなんでもよくできる。ぜひ趣味と実益を兼ねて励んでいただきたい。

(2) 主な食料の出回り状況

米——タイ米、カリフォルニア米、カメルーン産などが出回っているが、バンコクの日本料理店でも使っている良質の「芳香米」がわれわれには最適である。

パン——フランスからの輸入小麦から作っており、カメルーン人はフランスよりおいしいと自慢している。種々のフランスパンをパストス（ヤウンデの日本人は全員この地区に居住しており、日本大使館もある。市の北東部に位置する）のパン屋で買える。スーパーのパンはまずい。

めん類——イタリア料理の材料はある程度流通しており、マカロニの類いは多い。外国人が行かないスーパーではあるが、フックという店には中華めんがあり、スープ次第で結構食べられる。

肉、乳製品——輸入品は相当高価であるが、現地産もある。輸入のハム、ソーセージ、パテの類いも種類が多く楽しめる。

果物——マンゴー、パイナップル、アボカド、パパイヤ、バナナ、かんきつ類などは現地産が豊富である。街頭でも果物を売っているが、外国人に対してはスーパーより高いぐらいである。ブドウ、リンゴ、洋ナシ、イチゴ、モモ、プラム、キウイなど、時期になればフランスから輸入しており、相当高価であるがおいしい。

野菜——タマネギはチャード湖近辺でも栽培している良質なものがあり、じゃがいもも西部高地で産出するよいものがある。トマトは輸送中の傷みが少ない皮の厚いものだが、日本のトマトに似た味と形をしたものもある。キャベツは年中良質のものがあり、白菜も良質ではないがときどき店頭に見られる。長ネギは葉タマネギで代用できる。レタスも輸入物は良質である。ナスはいろいろ種類があり焼きナスにできる大きさと形のものもある。きゅうりも関西型の丸いものと関東型の青くさくトゲのあるものの 2種類がある。さといも（タロ）は大きい硬く、ヤム、ココヤムは日本人にはまずく、マニョック（キャッサバ）およびその製品は青酸が十分抜かれていないのでたくさん食べると苦むこととなる。少しでもすっぱく感じるキャッサバ製品は、ひと口試すだけで多く食べない方がよい。さつまいももアクが強い。

魚類——輸入冷凍物を解凍して売っているが、その鮮度から日本人には無理である。近海物の冷凍物はイカ、小魚が食べられるが、ほかの魚類はみたこともない魚が多い。エビは種類が多くおいしい。カニは輸入解凍物は新鮮ではない。リンベ、クリビに行けば近辺の漁港に揚げた新鮮なヒラメなどが入手できる。

調味料——コショウ、丁子、ウコンなどはあるが、味の素など化学調味料はない。コンソメのキュービックはあるが、かなり品質が落ちている。中国製のしょうゆはときどき入荷するが、品質が落ちているのか煮物ぐらいにししか使用できない味である。しょうゆ、みそは東京で粉末が入手できるので、持参すべきである。みりんはなく、酢は当地産でだいたい間に合うが、すしなどには無理のようである。カレー粉を持参しておく、いろいろ役に立つ。

食用油——大豆油、コーン油は当地産でも使えるし、オリーブ油も入手できる。

酒類——日本酒はまったくないが、イーストがあるので、こうじを乾燥して持参するとタイ米から濁酒を造れる。販売しなければ、これは違反ではない。現地の人はヤシ酒を盛んに造って飲んでいる。ビール、洋酒は日本より安く、無税購入している人はいないようである。

飲料水——水道水は濾過、煮沸しないと飲めない。瓶詰の水を飲用しているが、これとて井戸水を濾過しただけなのでバクテリアは問題ないが、ウイルス類には不安があるかもしれない。

(3) 食料の入手

スーパーマーケットでほとんど購入することとなろう。街頭ではパンと果物を売っているが、外国人には法外な値段を要求する。パンはパン屋でできたてを買うとおいしい。

ヤウンデでは、国会議事堂近くのサークル寄りを降りたところで白菜などを作っている農民がいるので、ときにはここを訪れてみるのもよい。

地方に出かけた時は、新鮮な野菜、果物を入手することができることもある。ただし、キャッサバ加工品には前述のように注意すること。日本からたびたび空送することは、税関が面倒で実質上不可能である。

1-2 食器・調理器具など

(1) 食器・調理器具などの入手

プロパンガスを使用することとなるので、それ用の器具を購入する。電気料が高いので、電気を使用する調理器具は炊飯器と電子レンジ程度である。洋食器は少々高いが入手可能で、鍋、フライパンなどはテフロン加工のよいものがある。

フランスの食器・調理器具はかなり輸入されているとあってよいが、高価である。食器・調理器具に限らず、フランスでのフランス・フラン価格にゼロを2つつけてCFAフランにしている。輸入器具は実質2倍の価格になっているとあってよい。

(2) 日本から持参した方がよい食器・調理器具など

赴任当初はホテルに居住することになるが、食費は異常に高く、パンとコーヒーだけの朝食でも 4,000 C F A フラン (2,000 円) もする。したがって、ときにはホテルの部屋でお茶をわかしたり、果物を食べたりすることになるので、小型湯わかし、缶切り、果物ナイフ、はし、ポリ袋などはチェックインバゲッジで持参したい。

また、別送品の無税通関手続は勤務先から大蔵省に依頼して無税通関証明書を税関に発出してもらい、その写しを持って空港で受け取ることになるが、証明書発出に 2～3 ヶ月を必要とする。したがって、小型炊飯器、調味料などもできれば持参した方がよい。

海送の期間は 2 ヶ月を要し、シンガポールなどでの積み替えをまちがえると 4 ヶ月かかることもある。その間に奮戦して無税通関手続を終えておかねばならない。別送、海送した方がよいものは、炊飯器、電子レンジ、圧力釜、蒸し器、すりばち、しゃもじ、はし、和食器などである。また、プラスチック製のザルなど軽いもので便利なものは、なんでも購送するのも一案であろう。流しの生ゴミ用の三角コーナーは、ぜひほしいものである。

そのほか、日本の座敷ぼうきのようなぼうきが珍しく当地にはあるが、日本人はカーベットの敷きたがるので電気掃除機を送るとよいし、ハマターンの季節には家中砂だらけになるので、電気掃除機は必需品である。当地には電気掃除機は少なく、モップもよいものがない。

1-3 外 食

(1) 飲食店

ホテルの食堂での食事は異常に高いので、ふだん利用することはまずない。フランス料理店も適当な店がなく、現地のレストランでも特にワニ、ヘビ、ハリネズミなど、いか物を試みる時以外には利用することがない。もちろん、日本レストランはなく、通常日本人が利用するのは、ヤウンデでは次のレストランであるが、結構高い。小井のワンタンスープが約 3,000 C F A フラン、春巻が 4 個ぐらいでやはり 2,800 C F A フラン (約 1,500 円) ぐらである。

中華料理店——Chezwou、Grande Muraille

カンボディア料理店——Baguette Cl'or

イタリア料理店——Pastio

韓国料理店——Asiana

(2) その他の飲食店

バーは 2～3 軒あるが、キャバレー、カラオケなどはない。

2. 衣 料

2-1 衣 料

(1) 一般事情

真夏と初夏の衣料を持参するとよい。雨季には涼しくなり、夏の上着が欲しいぐらいで、早朝には夏掛けが必要となる。チャード湖周辺に冬季に出張する時は、ジャンパーも必要となる。

官公庁の役人は一般に相当おしゃれで、ネクタイ、上着を常用しているが、外国人はラフな服装で許される。

(2) 日本から持参した方がよい衣料

どんな衣料でも、雑布でも持参した方がよい。当地での購入は期待しない方がよい。

(3) 任国で調達した方がよい衣料

現地の人の青空マーケットには品物も多く並べてあるが、極端に治安が悪いので、よほどのことがない限り足を踏み入れない方がよい。とり囲まれての事故が発生している。

ゴムぞうりぐらいしか、当国で調達しうるものはない。ゴムぞうりでも、フランス製は異常と思える価格である。ナイジェリア製のものが安い。

(4) その他の留意点

傘、雨具は通常車を使うためあまり必要がないが、傘なら当地はゴルフ用傘を使っているのでそれに似てない品物がよい。夏用の帽子も出張の際には必要である。日差しはかなり強い。

2-2 礼 装

(1) パーティ

あまり盛んでなく、フランス人社会に入らなければ特に気にする必要はない。

(2) 式 典

現地型式典には危険があるので、近づかない方がよい。まず参加する式典はない。

(3) その他の冠婚葬祭

赤ちゃんの誕生祝い程度である。

(4) その他の留意点

ダークスーツを 1着持ってくれば、特に留意することはない。

2-3 洗濯、仕立て、修繕、保管

(1) 洗 濯

すべて自身か使用人にさせるつもりで、外に依頼することはあてにしない方がよい。なお、カメルーンの洗濯機は 1槽式全自動である。ほとんどフランス製のものである。

洗剤は固形、粉末ともにたくさんある。台所用洗剤も豊富にあるが、漂白剤の類いは見当たらず、衣類用のものもみかけない。

(2) 仕立て、修繕

(3) 保 管

3. 住 宅

3-1 住宅事情

(1) 一般事情

1992年 7月頃の時点では、社会不安のため外国人は減少傾向にあるので、住宅の需給は比較的緩和している。1ヵ月の家賃は40万～60万CFAフラン(20万～30万円)で、6ヵ月～1年分の前払い、仲介料は年家賃の6%で、家具なしが普通である。家具付きとするにはあっせん業者と相談すればよいが、現地に詳しい友人がいれば自分で購入するのも一策である。

冷蔵庫、フリーザー、ガスレンジ、ミキサーなどは少々高価ではあるが、日本から持参するより当地での購入をすすめる。ソファ、ダイニングテーブル、食器棚、タンスなどの家具はフランス製は高価であり、現地製で十分である。

(現地製でも日本よりはるかに高価である) 材質はよい。家具付き住宅とする場合には、必ず全部入れさせてから入居することが肝要である。また、エアコン、カーペット、カーテンなどはつけさせるよう交渉する。一般に家屋にはなんの家具も棚もなく壁だけで、途方に暮れるほどである。もちろん、下駄箱なんていうものもない。

(2) ホテル事情

ホテルの宿泊費は相当高く、ヤウンデではおそらくヒルトンホテルに赴任当初入ることになるが、宿泊費は1泊4万5,000CFAフラン、朝食4,200CFAフラン、ブュッフェ昼食が6,700CFAフランである。

ドアラには日本人が利用できるホテルが多い。地方都市には比較的設備のよいホテルやバンガローがあり、安心して出張できる。

(3) 住宅の探し方

ドアラでは安全上のため日本人が住んでいるマンションに入居することになるので、在住日本人に相談するとよいが、ヤウンデではあっせん業者に依頼するしかない。信用できるあっせん業者は少ないので、大使館に紹介してもらうとよい。

(4) 住宅の選定上の留意点

ドアラではアパートなのである程度の制約があるが、アパートといえども安全対策を十分に考慮しなければならない。

アパートでもガードマンはおおむねひとりしかおらず、その目を盗んで廊下に入れば、あとは玄関の鍵は簡単に開けられる。問題は、玄関を入ってから寝室までの廊下に、何ヵ所かの頑丈なドアが必要で脱出口もあることが望ましいが、アパートの場合はいちど玄関を入れれば、広間を仕切って部屋を作ったような構造になっているところが多い。

ヤウンデでは独立家屋とアパートの両方が可能であるが、独立家屋の場合には次のような注意が必要である。強盗が入りやすく車で逃走しやすい場所でないこと。塀が高く、外から内部のようすがのぞきにくいこと。2階建てでは寝室は2階にあり、容易に2階に侵入できないこと。廊下には何ヵ所かの頑丈なドアがあること。できれば、そのうちの1枚に鉄格子が入っていること。脱出

口があること。犬を飼う余地があること。窓や玄関には鉄格子が入っていることが必須条件である。

安全対策以外には特に留意することはないが、あえて挙げれば、前住者の後始末（トイレの残滓だまりを掃除させる。電気代、水道代の未払いがないかなど）をすることである。また、1週間にいちどぐらいは断水があるので、水槽からのポンプアップの設備が必須である。

(5) 住宅の契約

仲介業者が持っている契約のフォームには「借家人が火災保険に入ること」との条項があるから、これを除かせること。なお、契約書には必ず収入印紙をあっせん業者にはらせなければならない。

(6) 電気、ガス、水道などの手続と管理

ガスはプロパンガスを使用するので、特に問題はない。電気、水道は前住者の支払いの残りが必ずあるので、契約書の写しを持って仲介業者と水道局、電気局を訪れ精算させておく必要がある。でなければ、入居したとたんに局員が支払いの残りを理由に供給ストップにくることが多い。この場合、当方の理由は聞き入れず、局まで出向いてわけを話して納得させ、工員を車に乗せて連れてきて、栓を開けてもらい開栓料を支払うことになる。それだけならまだよいが、次の月も同じことを繰り返さなければならないかもしれない。

日本人家庭は電気の使用量が多いため、アンペアを大きくしないと、多くの電気器具をいちどに使用したり、断水の時ポンプで揚水した時などにブレーカーが落ちることがある。アンペアにより、使用開始時のデポジット料金が異なる。

また電気料の請求については、数ヵ月たって突然住居に請求書を持参し「今ここで支払わなければ切る」といい、しかもこれが偽職員であったりする。したがって、2～3ヵ月たてば月末日に自分でメーターをみて、局に行き支払い手続をした方がよい。このため局に3日ぐらいは日参するだろう。

水道でもデポジットが必要で、請求書は毎月持ってくるが、ほかの住宅の請求書で要求したり、計算まちがいは毎度のことであり、何回か水道局に通うこととなろう。

電話は前住者が退去した時ケーブルを除去しており、ケーブルを設置するのがむずかしいため、入居後6～7ヵ月で電話が設置できれば甚だ幸運である。大使館の尽力があっても、1年近くかかるだろう。仲介業者は残っている屋内配線を示して「配線があるからすぐに設置できる」というので、だまされないようにすること。

(7) その他

独立家屋の場合には、庭が広くマンゴーなどが植えられ、ときにはその下でバーベキューを楽しむこともできる。木炭もスーパーマーケットの入口などで売っている。家庭菜園もぜひ実行してほしい。なにぶん屋外の楽しみが少ないうえに、昼間でも強盗事件があるため、特に女性は屋敷内にとどまることが多いので、屋敷内での楽しみを増やす工夫がほしい。

4. 医 療

4-1 赴任前の準備

(1) 予防接種

東京、横浜の検疫所では、カメルーンでは黄熱病の予防接種が必須となっていなかった（1991年末）が、当地では必須であるので注意することが肝要である。

(2) その他の準備

できる限りの準備をすべきであるが、黄熱病と破傷風以外は実質的対策を日本国内で行なうのは困難ではなかろうか。当地の狂犬病ウイルスに対応するワクチンが日本にあるとは聞いていないし、日本人は一般に栄養状態がよいので、コレラにかかりにくく、かかっても軽いといわれている。

4-2 医療事情

(1) 医療機関

Mission Francaise と Laboratoire T. Bella がなんとか利用できるかといわれているが、まず信用できる医療機関は国内にないといってよい。

(2) 緊急時の対応と措置

できるだけ早くパリに脱出するしか方法はない。盲腸の手術で死亡したり、腸ポリープ除去をやり直した例もある。

4-3 医薬品など

(1) 携行することが望ましい医薬品

カメルーンの医療機関と薬局に依存せず、危険を冒さないことと、できるだけ医薬品を持参する必要がある。

蚊取りマットや蚊取線香も売っているがあまり効果がないので、バルサンや日本製の蚊取りマット、蚊取線香、予防のスプレーはぜひ用意したい。殺鼠剤も欲しい。

(2) 任国で調達できる医薬品

(3) 任国で調達できる衛生用品

衛生用品はスーパーで購入できるがよいものでなく、前時代を感じさせるようなものである。

(4) 医薬品を使用する場合の留意点

4-4 妊娠、出産、育児

(1) 妊娠した場合の対応

当国では妊娠、出産は控えた方がよいの一語につきる。

(2) 出産後の対応

(3) 育 児

育児用品も肌着が少し売られているだけで、日常のたしにはなりそうもない。しかも純綿のものが少ない。

4-5 手 術

(1) 任国で可能な手術

手術も危険であり、輸血による肝炎、エイズの危険も大きい。

- (2) 手術設備の状況
- (3) その他の留意点

4-6 任国でよくかかる傷病

(1) 一般の疾病

何より危険なのは交通事故である。かぜ、腹痛など日本でなじみの深い病気が多いので、これらの薬品は十分すぎるほど持参すべきである。

(2) 風土病・伝染病

ヤウンデは 800メートルの高地にあるため、腸チフス、コレラ、赤痢などの流行は少ないようであるが、現地の人多くはマラリアにかかっている。ドアラでの日本人の多くは予防薬を使用しているが、ヤウンデでは使用している日本人は少ないようである。最近発表されたWHOのマラリア対策の3つのうちのひとつに、かかってから薬を飲むという方法が含まれているほど、効果の大きい薬が2種類発売されたといわれている。

(3) 有害動物、病害虫

グリーンスネークの死骸を道路上に何回もみた。また主として家畜に、ときとして人間にも卵を生み着け、皮膚下でウジとなり羽化して出てくるハエがおり、日本人も被害にあっている。

4-7 保健衛生

(1) 飲料水

2～3種類のプラスチック、ボトルに入った飲料水をスーパーで購入できる。水道水はときどき断水し（2日間ぐらい断水していることも、まれでない）、断水後は白濁あるいは赤濁した水が出る。もちろん、そのまま飲めるものではない。

(2) 濾過器の入手法

スーパーで素焼きの筒を利用した濾過器と、木綿糸を厚く巻いた筒により濾過するものを販売している。非常に高価であるが（5万～6万円）、十分な効果はない。日本製の活性炭素を利用した濾過器などを送るとよい。日本から浄水器を持参する場合は、カートリッジのスペアは十分持参すること。泥砂のような赤濁した水が出たりで、カートリッジの目詰まりが早い。

(3) その他の留意点

5. 教 育

5-1 教育事情

(1) 一般事情

教育事情もいたって悪い。日本人学校はもちろんなく、フランス人経営の学校で初等教育は受けられるが、現在通学している日本人児童はドアラに 1人いるだけである。教育制度はフランスの制度をそのまま継続している。

(2) 日本人学校

(3) 現地校、外国人学校

(4) 幼稚園

5-2 入学手続および授業料

(1) 日本人学校

(2) 現地校、外国人学校

(3) 幼稚園

5-3 教育関係施設

(1) 図書館

(2) スポーツ施設

5-4 家庭学習

(1) 家庭教師

(2) 通信教育

(3) 携行した方がよい家庭用学習教材

6. 家庭の使用人

6-1 一般事情

最近の経済情勢の悪化により失業者が増大し、一方、外国人が減少していることもあって、自薦、他薦の候補者が多い。しかし、単なる盗難事件は使用人によることが多いといわれ、また、強盗などの手引きをする者も多いといわれている。したがって、十分信用のおける人に依頼する必要がある。例えば、ある部族の王族で使用人およびその縁者に相当のにらみがきく人などがよい。いずれの使用人でも1～2ヵ月の試用期間をおき、試用期間は普通の雇用期間より若干給与が安いのが通常である。

6-2 運転手

(1) 雇用

タクシー運転手経験者が多いが、運転も気も荒いので、できればこれは避けた方がよい。交通事故を起こした時、言葉の問題と物見高く集まって騒ぐ気質のため処理がなかなかたいへんなのでぜひ雇用したい。

日曜日と主要な祝日を休みとして月給は6万CFAフラン程度、超過勤務は1時間当たり200～300CFAフランである。社会不安の増大により、パーティなど夜間に働くことを嫌がる人も多いので、十分確認しておくべきである。

(2) 日常管理

タクシー、官庁、会社の運転手として経験してきた者が多く、個人の運転手として働いてきた者は少ない。したがって、雇用当初の管理が重要になってくる。

(3) 教育指導

ときどき高級なレセプションに招待されたり、また現地の人のレセプションでは客の食事の後、運転手も入って食事を許されることがあるので、このような時には見苦しくない服装を心がけさせねばならない。

(4) その他の留意点

6-3 メイド／サーバント

(1) 仕事の種類と人数

ひとりのメイドあるいはコックで調理と掃除をするのが普通であるが、労働時間が短いので朝食の準備も夕食の後始末もできず、あまり役に立たないと考えている人も多い。

(2) 雇用

信用のおける人に紹介してもらい、1日中メイドのあとをついて回り監督しなければならぬような羽目になることを避ける。やはり、1～2ヵ月の試用期間をおくべきである。

(3) 日常管理

6-4 庭師、ガードマンなどの雇用

(1) 雇用

アパートの場合は、昼夜交替でひとりずつのガードマンをおいているが、その目を盗んで侵入するのは容易なので信頼できない。

独立家屋の場合は、昼間のガードマンが庭師と屋外の階段などの掃除を受け持つ場合が多い。ヤウンデにはアメリカ人が経営する警備会社があり、ときどき四輪駆動車で巡回し、またガードマンの訓練もできているが、昼夜で30万CFAフランと高く、庭師を兼任させることもできない。ガードマンをあまり信用せず、番犬を飼うことが望ましいという人もいる。

7. 交通事情

7-1 交通手段

(1) 一般事情

ヤウンデ、ドアラともに自動車の混雑は特にラッシュアワーはたいへんで、事故の発生も多い。

市内バスはほとんどなく、そのかわりを果たしているのがタクシーで、特定のルートを走りそのルート途中で降りる客を相乗りさせている。150CFAフラン程度の相乗りであり、危険も多いので日本人はほとんど利用しない。やむを得ずタクシーを使用する時は、空車を待ち行き先を告げて値段の交渉をするが、市内はたいへい（あるいは1時間）1,000CFAフランぐらいである。ドアラには白タクが非常に多い。

モーターバイクと自転車は、たいへん少ない。また定まったコースをしばしば歩くのは、危険を伴う。

(2) 自家用車を利用する場合

自家用車を入手した後はなんら問題はないが、できるだけ自分で運転せず運転手を雇うことである。事故の処理が困難であるし、夜間のひとり運転は危険を伴う。

(3) レンタカーなどを利用する場合

AVISのレンタカーが信用されているようだが、たいへん高くつくので、自家用車が入手できるまではタクシーを使う以外にない。1,000CFAフランを払えば、通勤途中でスーパーに10分ぐらいは無料で寄ってくれるので、その間に急いで買物をする事となる。夜の招待は、残念ながら断らざるを得ない。

(4) 道路地図

2～3種類の地図があり、おおむね全国とヤウンデ、ドアラの市街地図が印刷されている。これらは書店で入手できる。

7-2 交通事故

(1) 対処方法

不幸にして事故にあった時は、すべて運転手に任せることである。公用車の場合は保険に入っておらず、政府ガレージで修理し運転手が責任を負う。私用車の場合は警察を呼び、事故調査をさせ保険で処理することとなる。

(2) 救急病院

人身事故の場合は、そのうち救急車がきてくれて病院に運んでくれる。特に救急病院はなく普通の病院であり、日本人ならば支払いに不安がないので、それなりの手当てはしてくれるであろう。

(3) 盗難

事故の際に限らず、すべての盗難は強盗などの場合と同様で、警察を呼んでもすぐくることはなく、翌日頃に調査にくるが何もできない。したがって、盗難の場合は警察を呼ぶこともなく、「やられたか」で終わりとなるのが通常である。

7-3 交通違反

(1) 交通法規

車両は右側通行であり、右ハンドルの車はいまだみたことがない。十字路口などには交通信号があるところもあるが、警察がいない時には無視している車をよくみかける。注意すべきはラウンドアバウトであって、妙なことに右側からの進入車優先になっている。既進入車に右側からの新進入車が衝突することが多いので、進入し終わった時には常に右に注意し、譲らねばならない。

(2) 対処方法

ときどき警官が車を停止させ保険証のチェックをするが、灯火、シグナルなどのチェックはしない。保険非加入を発見されても、1,000 C F A フランで放免されるとのうわさもある。

7-4 車の修理

(1) 部品

(2) 修理工場

トヨタ、ニッサン、三菱など主要メーカーの販売、修理工場があり、ほとんど問題はない。

8. 通 信

8-1 電 話

(1) 一般事情

すでに述べたように電話の設置は至難であるが、いったん設置されれば国内、国外とも特に問題はない。社会不安も原因して、日本人のほとんどは無線機を持っている。

(2) 国内電話

(3) 国際電話

8-2 電 信

(1) テレックス

(2) ファクシミリ

テレックス、電報も可能であるが、郵便事情が非常に悪いため、日本人はほとんどファックスを使用している。しかし J I C A 関係者は、本部からの連絡は日本大使館に入ってくるが、カメルーンからの発信は国営郵便を利用するほかはなからう。

(3) 電 報

8-3 郵 便

(1) 一般事情

郵便事情は非常に悪く、カメルーンから日本まで14日ぐらいを要するが、着かない時も多い。日本からの場合は普通 2週間程度を必要とし、ときには1ヵ月、数ヵ月、また着かないで行方不明になることもある。また現金に似たものや、写真でも少し多いと開封されていることもたびたびである。

DHLはわれわれ個人が使用できるほど安いものではない。専門家は J I C A 事務所がないので、日本大使館の私書箱 (B. P. 6868) を使用させてもらうことになる。

(2) 課 税

日本大使館の私書箱を使用させてもらう場合は、日本大使館の現地職員が税を支払い入手してくれるので、現地職員に払えばよい。当地日本大使館の現地職員は、皆親切である。

9. マスコミ

9-1 新聞

(1) 主な日刊紙

主要な日刊紙は政府系の「Cameroun Tribune」であり、英語、フランス語の両方がある。そのほか多くの新聞が発行されており、フランス語の新聞は街頭で、「Cameroun Tribune」の英語版は新聞社までとりに行つて入手する。言論は自由な国であるとみられる。

(2) 本邦日刊紙

本邦日刊紙や週刊誌は個人で郵送させるような安価なものではないので、大使館、商社などの好意により1ヵ月程度遅れのものを読ませてもらうこととなる。日刊紙は1週間ぐらいの遅れで1ヵ月8万CFAフランぐらい、5日遅れぐらいだと15万CFAフランぐらいとのことである。

(3) 欧米紙

ヒルトンホテル、ソフィテルホテル、書店、スーパーなどで購入できる。

9-2 ラジオ

(1) ラジオ放送局

現地ラジオ放送局の放送は現地の音楽が多く、日本人はあまり聴いていない。テレビをみることになる。

(2) ラジオジャパン

ラジオジャパンは日中は聴きにくい。(8:00、17:00) ガボン中継の方向に入っていないためではないかという人もいる。21:00と23:00の海外向け放送が比較的良好であるが、ハマターンの季節になるとほとんど聴きとれなくなる。

(3) 任国で聴取可能なその他の外国放送

外国放送はいろいろ入っており、BBCもVOAも聴ける。

9-3 テレビ

(1) テレビ放送局

1局だけPAL方式で放送している。討論などではフランス語が主体であるが、同場面で英語を話す人もいる。19:30から20:00ごろに英語ニュースが放送される。

(2) テレビ受信

パラボラアンテナがあれば、フランス、その他の国の放送もみられるが、個人では困難と思う。最近、あちこちの家でパラボラアンテナの設置がみられるようになってきた。

10. 教養、娯楽、趣味、スポーツ

10-1 映画、演劇

(1) 映画館

映画館、劇場ともにあるが、日本人には入場しにくいようで経験者を知らない。

(2) 劇場

同上。

10-2 出版・書籍

(1) 一般事情

(2) 書店

小さな書店がいくつかあり、フランス語の書物、英語学習書など、どの店も同じような書籍を売っている。児童向けのもので、宗教に関したものとか、アフリカ英雄物語の類いのもので、アンデルセン物語などお目にかかることはない。

特に大きな書店というものはなく、専門書などは入手しにくい。まず英仏辞典、地図、カメルーンの概説書、質の悪いノートや文房具程度しか買えるものはない。

10-3 語学学習

(1) 語学学習施設

ヤウンデで日本人の成人が勉強する場としては、フランス語ではバイリンガルスクール、英語ではブリティッシュカウンシルがあるが、前者の評判はよくない。

(2) 家庭教師

フランス語の家庭教師も特に探せばいそうだが、おそらく相当高価につこう。ドアラで現在家庭教師を頼んでいる日本人女性の話では、1時間当たり7,000 CFAフラン以上とのことである。したがって、教材を日本から持参した方がよい。

10-4 文化活動、文化施設

(1) 一般事情

(2) 日本・任国友好協会などの有無と活動の内容

日本・カメルーン友好協会など日本人と現地の人との交流の場も、日本人が参加できる文化活動も、文化施設も不幸にして存在しないようである。

(3) その他の文化活動、文化施設

10-5 写真、ビデオ

(1) 写真

(2) ビデオセット

(3) ミュージックテープ

ビデオカセット、ミュージックテープも販売されてはいるが、ほとんどフランス語で日本人は利用していないようである。日本の会社や家族から送ってもらっている人が多い。

10-6 音楽鑑賞、演奏、民族楽器

(1) 音楽会、コンサート

ヤウンデとドアラの日本人の音楽愛好者がときどき集まって演奏を楽しんでいるが、音楽会、コンサート、民族舞踊などに日本人が招待されたというようなことは聞いたことがない。テレビでは、しばしば放映されている。

(2) コーラス、演奏グループ

(3) ピアノなど

(4) レコード

(5) 民族楽器

(6) その他の楽器

10-7 手芸、絵画、美術工芸

(1) 手芸

(2) 絵画、美術工芸

コートジボアールあたりから、西アフリカ一般にどこでもみられる木彫り、籐製品、絵画などが土産物店で販売されているが、特色のあるものを発見するのは困難である。また、その製作を楽しむ趣味の集団もないのではなかろうか。特色のある染物も、織物も見当たらない。

10-8 趣味

(1) 園芸

既述のとおり、家庭園芸は独立家屋の場合、大いに楽しむべきである。種子、球根、種苗などを持参すれば、くわなどの園芸用品や粒状化成肥料はスーパーで販売されている。種子類もトマト、ピーマン、いんげん、ビートなどを購入することができる。しかし、大根、シソ、ネギなどはないのでベランダ園芸でも作ってみたいし、マンション住まいの日本人達もベランダでニラやシソなどを作っている。

殺虫剤、展着剤、容量 1リットルの噴霧器を持参するとよい。噴霧器は家の周りの蚊の防除にもたいへん役立つ。蚊やアリの除去専門業者がいるが高額を要求するし、しかも隣近所と同時共同して行なわないと効果が少ない。それでもマラリア対策として屋敷内の蚊退治は重要なので、園芸用品と蚊対策を兼ねた殺虫剤を考慮すると便利であろう。主な園芸害虫はアブラムシ、カイガラムシ、ウドンコ病などである。

タイやネパール程ではないが、ウリミバエがいるので、瓜類の栽培には、寒冷紗が必要である。当地のトマトやきゅうりは皮の硬い品種になっている。

(2) 釣り

ドアラ近辺は海水の汚染が甚だしく、釣っても食べることはできない。ドアラの北方のリンベか南方のクリビまで行けば、釣りも可能で魚も食用になるはずであるが、釣り人をみたことはない。水泳をする人もみない。日本人の車の窓が壊され金品が盗難にあったこともあり、治安の問題を常に考えなくてはならないだろう。リンベとクリビのホテルでは新鮮なヒラメ、スズキのフライやエビが食べられるので、近くの漁村から新鮮な魚を買い、アイスボックスに詰

めて持ち帰れるような雰囲気や気分になれる日が期待される。

10-9 娯楽、遊戯など

(1) 娯楽、遊戯、ゲーム

マジャンも人数が揃うのがむずかしく、カードもできない。碁、将棋も新聞をみながらひとりで並べてみる程度である。

(2) 芸能興行

10-10 スポーツ

(1) ゴルフ

ヤウンデとドアラにひとつずつゴルフ場があり、ヤウンデのゴルフ場は暑くなく快適である。ゴルフクラブの会員になれば、ときどきコンペやフランス人会員の送別コンペ（不思議なことに歓迎コンペはない）に参加できる。そのコンペもテキサスとかクレージクロスとか凝ったアイデアがあり、プレーを楽しめる。

クラブキャリアを使用する人が多いのは、まず平坦なところで打つことがないほどアンジュレーションに富んでいるためであろうか。ボールはロストが売られている。ヤウンデにはゴルフ用品を販売しているところはない。ロストボール以外は入手不可能なので、日本かフランスで調達する必要がある。

(2) テニス

ヤウンデではヒルトンホテルとソフィテルホテルでプレーできるが、ひとりの都合が悪いとコーチ相手に練習の羽目になる。ボールはできれば日本かフランスで調達したい。テニスシューズは当地でも日本ぐらいの価格で入手できる。

(3) 水 泳

ヤウンデでは、上の両ホテルで泳ぐことができる。子供の遊べるところはここぐらいしかない。

(4) その他のスポーツ、用具、ウエア

サッカーが盛んで、あらゆる空き地でやっている。世界第 4 位になったこともあり、日本チームは歯がたつまい。当地では、日本人が仲間入りすることも無理であろう。日本大使館にはピンポン台と用具があり、人待ち顔である。

朝のジョギングが、特に国会議事堂、ゴルフ場の周囲で非常に盛んで、小雨の降るなかでもやっているが、外国人が参加しているのはみたことがない。

(5) スポーツクラブなど

10-11 風俗営業

バーが 2～3 軒あり、日本人も利用できる。日本のように費用がかからない。ホテルのバーは逆にたいへん高く、ミネラルウォーターが 1本 900 C F A フラン、ビールの小瓶も同値段が普通である。

10-12 子供の遊び

ヤウンデには日本人の子供はいないが、ホテルのプールぐらいしか遊び場はないと思われる。

11. その他のサービス

11-1 美容院

ヤウンデには現在(1992年 8月)日本人女性は 2人のみであり、フランス人社会には比較的入りにくい。美容院は現地の人が経営している店があちこちにあるが、客として入るには勇気が必要のようである。フランス人に聞いたところでは、腕の方はまあまあとのこと。また、フランス人経営の店もあって、予約をしてから行くといふ。英語は通じない。

11-2 理髪店

日本人はホテルの理髪店を利用しているが、この際、配偶者の腕を磨くことにしてはどうだろう。皮膚病などの伝染病から免れることにもなる。現地の人の理髪店は木陰などで、いろいろなスタイルのカット写真をベニア板にはりつけて客を待っている。

11-3 日本より持参の方がよい美容・理髪用品

自分に必要なあらゆるものを持参の方がよく、現地調達は期待しない方がよい。たまたま入手できたとしても、時間がたちすぎているせいか、気温のせいか、変質して化学変化を起こしているものもある。ある日本人は、スーパーで買った整髪料のその強いにおいに閉口していた。スーパーにはフランス製の美容・理容用品も並べられているが、スポンジパフなど、ポロポロと崩れたりして、使いものにならないものもある。好みもあるので、石けん以外はなじみにくいのではなかろうか。

特に化粧品は持参の方がよい。船便だとコンテナの中が高温になるせいか、変質するものもあるので注意が必要である。歯ブラシなども自分に合ったものを探すのはたいへんである。日焼け止めクリームなどに至っては、現地調達は不可能である。また、乾季には唇の荒れ、髪や肌の乾燥も激しく、それらも考慮する必要がある。

12. 観 光

12-1 地方旅行上の留意点

地方都市のホテル、バンガローなどは比較的清潔で利用できるが、宿泊費、食費は相当高い。バメンダ、ヌガウンデレ、マルアなどにはヤウンデやドアラ顔負けのホテルがある。水や電気などのサービスは、入ってみなければわからないが…。

衣服については、季節と地方により十分注意しなければならない。サヘル地方の乾季は、日中は酷暑で夜間は酷寒であり、海岸地方の湿気の多い暑さはまた身にこたえる。

12-2 主要観光地・保養地ガイド

国内にはいくつかのリザーブがあるが、ケニアやカラハリのような雄大さはなく、動物の種類も少ない。出張の際、ちょっとのぞいてみる程度で、特に訪れるほどのものではない。ただし、旅行会社などでツアーを組んでいるところもある。

カメルーン山は標高 4,100メートルで、当国でいちばん高い山であるが、なだらかな岩山であり、登山客はあまり多くない。高山病での事故などもあり、登山には警察の許可が必要である。

リンベおよびクリビについては、すでに述べたとおりである。

西北部州は観光地にはなっていないが、バメンダ周辺に相当高い滝、カルデラ湖、クレーター湖などがあり、気候も涼しく日本の田舎に似た農業の発達した地帯である。かつてイギリス領であったため、住民は英語を話す。なお、クレーター湖などへ行くには、四輪駆動車でなければむずかしい道があるので留意すること。

12-3 旅 行

(1) 自動車

舗装道路はドアラ～ヤウンデ～バフサムの三角形道路とヌガウンデレ～ガラア～マルアの北方道路とそれらの周辺のみに限られる。バフサムからヌガウンデレまでは、四輪駆動車で早くても 3日間を必要とする強行軍となる。したがって、三角形道路とその周辺のみが、乗用車で気軽に家族連れで旅行できる。食品の調達、燃料供給、宿泊、自動車修理などの問題は少ない。

北方道路地域に行くのには、バフサム～ヌガウンデレの道路利用は特に途中で用事がある時か、北方地域で官庁などの車が期待できず四輪駆動車を持ち込みたい時に限りたい。通常、ドアラ～ヌガウンデレを空路にするが、好みによってはヤウンデ～ヌガウンデレ間を汽車とするのもよからう。

(2) バス

三角形道路間は長距離バスが運行しているが、日本人には利用をすすめられない。

(3) 鉄 道

ドアラ～ヤウンデ～ヌガウンデレ間を走っており、牛、ヤギ、タマネギ、綿などの農産物を北から南に運んでくる。乗客の利用も多い。

(4) 航空機

国内定期便は、ヤウンデ～ドアラ～ヌガウンデレ～マルアを飛んでいる。したがって、ヤウンデから直接ヌガウンデレに行くことはできない。ヤウンデからドアラまで車で 3時間程度なので、ドアラまで車で行き、それから国際便に乗る人も多い。

12-4 エージェント

ヤウンデには 2～3のエージェントがあるが、電話で予約できるなどの理由でジェリー・ボヤージュを使う日本人が多い。しかし、ホテルの予約などはできない。

12-5 ホテルなど宿泊施設の手配

予約なしに行って地方のホテルで泊まれなかったということは聞いたことがない。一方、予約しておいても連絡なしに平気で宿を変えている。

13. 治安、緊急時の心得

13-1 暴動、クーデターなど

(1) 緊急時の連絡

1992年 3月 1日の総選挙直前には国内各地で暴動が発生し、焼き打ちなどもあったが、その後、落ち着きをとり戻している。しかし、与党はわずかに過半数に達せず極小政党と連立して辛うじて国会運営を行なっている有様であり、いつ再び騒乱状態に入っても不思議ではない。さらに、より以上の経済状態の悪化、失業者の増大、賃金遅配など、引き金がしだいに絞られてきているといつてよからう。農業省生産局が所轄する公社、公団の労務者はすでに4年の賃金遅配が続いており、憤慨した労務者が局の入口を封鎖し、警官隊がかけつけてこれを排除して、当局との話し合いを仲介することも何度かである。

住居の電話の設置はいつになるかわからないので、必ず無線の準備をして日本大使館と常に連絡可能にしておく必要がある。日本大使館には食糧の備蓄はなく、また防備も不十分なので、邦人はベルギー大使館に避難できるよう手配済みである。また、フランス軍降下部隊は日本大使館近くのバストスのタバコ工場に降下することになっているそうである。

13-2 強盗、盗難

(1) 一般的治安状況

(2) 防犯対策

強盗、盗難は極度に頻発しているので、徹底的な対策を講じなければならない。単に住居のみでなく、夜間の外出を避け、降車は門前でなく必ず門内に入ってからにするなどの注意が必要である。車の前後を仲間の車ではさみ、追い剥ぎをやるのも常套手段のひとつといわれている。1992年 3月 1日の総選挙前の暴動で武器庫が略奪されたため、武器が彼らの手に渡ったのだともいわれるが、ほとんどの強盗事件の場合、銃などで武装した4～10人ぐらゐの集団なので、抵抗は不可能である。

(3) 被害時の心得

13-3 火災、風水害、地震

(1) 一般的災害発生状況

まったくといってよいほど、これらの心配はない。

(2) 防災対策

(3) 被災時の心得

14. 出入国手続および帰国手続

14-1 入 国 時

(1) 空港施設概要

主要な国際空港はドアラにある。1992年に開港したヤウンデ新空港は、国際便の乗客が少ないため、カメルーン航空が申し訳程度に週 1便ローマに飛ばしているだけで、依然として国内空港の役しか果たしていない。ヤウンデから航空機を使用して出入国する際は、ドアラを経由しなければならないので誠に厄介である。加うるに、ヤウンデ空港ではポーターが悪質で、荷物や空港使用料がなくなるばかりか、チップ以外に法外な金を要求する。これを払えば税関と押し問答をするふりをしてパスさせるが、さもないと荷物検査を後回しにされ連絡便を失うこともある。連絡便はここでは待ってくれず、30分～1時間の間隔ではまず50%の確率で乗れないと考えた方がよい。

この様な状況にあるため、ヤウンデからドアラまで関係者に車で送迎してもらい、ドアラから航空機とする人が多い。やむを得ずヤウンデまで航空機を使用する時は、ドアラをスルーでチェックインバゲッジで送る。このためには、フランス航空、UTAを使用する。東京～パリ～ドアラ～ヤウンデをフランス航空ならスルーで荷物を送れる。

空港施設について特筆すべきことはない。ヤウンデも新空港が開港し施設はよくなったが、市内から遠くなったと評判は悪い。

(2) 入国手続書類

通常どおりである。

(3) 入国審査

特記することはないが、前記のとおり黄熱病の予防注射は必須である。

(4) 税関検査

行列に並ばないで押しかけるので、たいへん苦勞することになる。

(5) 空港内での留意点

担当官でもないのに担当官を装う者などがいるので、注意すること。

(6) 空港からのトランスポートーション

ヤウンデ空港から市内までタクシーは 3,500 C F Aフランと決められているが、旅行者とみると 5,000 C F Aフランぐらい要求するのはあたり前なので、3,500 C F Aフランぐらいまで値切ること。

(7) その他の留意点

日本で入手しているビザの有効期間は 3ヵ月なので、中央警察で滞在許可証をとる。その本物は大切に保管しておき、コピーを作り中央警察に本物と相違ないと印と署名をもらい、これを常に携行する。

主要銀行はCredit Lyonnais、Standard Chartered、Meridianの 3行である。Credit Lyonnais 銀行に口座を開設するのは手続が厄介で、日数がかかる。また、Convertible 口座への振込みと外貨買い取りはフランス・フランおよび C F Aフラン以外でなければならない。なお、日本の東銀から当行へ送金する時

には少なくとも1ヵ月を要し、中継するMeridian銀行の態度によって3ヵ月を必要とする。

Standard Chartered銀行は簡単にConvertible口座が開設でき、フランス・フランの売買も可能である。また、パリ東銀から当行に送金するには、Banco Franco Allemanedを通すよう東銀に依頼すれば2週間で完了する。しかし、必要なたびに送金依頼する面倒がある。

また、東京で口座を開設できる海外の東銀はニューヨークのみなので、パリ東銀に出頭して開設しなければならない。そのため順路直行により赴任する場合は若干の工夫を要する。

14-2 出国時

(1) 出国時の概要

(2) 出国手続上の留意点

出国ビザおよび再入国ビザの取得が必要である。これらには数種類あり、主なものは次のとおりである。

A 1、B 1フォームのコピーを提出すれば、印紙代は500 C F Aフラン2枚のみでよい。3ヵ月間有効の出入国ビザは、印紙代が1万 C F Aフラン、6ヵ月、1年間ではそれぞれ印紙代3万 C F Aフラン、6万 C F Aフランである。Direction General a la Surtete Nationalに申請すれば、通常翌日には発給されるが、事故、病気、暴動などに備えて6ヵ月あるいは1年間有効の出入国ビザを常に取得しておくことが望ましい。ただし、これら2種類のビザ取得には関係官庁などの依頼状が必要である。

なお、出国時に空港内で空港職員らしき者が何ヵ所かにおり、C F Aフランの所持を聞き、多く持っていることを答えるとトラブルになることがある。

14-3 帰国手続

(1) 帰国時に必要な事務手続

特筆すべき手続はないが、電気、水道、電話のデポジットはまず返還してもらおう余裕はない。

(2) 車の処分

最近経済情勢悪化のため車の処分が難しくなり、英国大使館員がランドクルーザーを処分しようとしたところ、誰からもコンタクトがなかったという日本人会ニュースレターがあった。

(3) 家財道具の処分

ガレージセールの際は聞かない。知人、隣近所の人達に連絡して、買ってもらっている外国人が多い。値段は結構高く設定しており、現地の人には非常に安くしないと売れないので声をかけないともいっている。中古家具を売っている家具店はない。日本人は今のところ後任者に譲っており、複数の人に売りさばいた例はない。

(4) 住宅の明け渡し

住宅の明け渡しの際のトラブルは少ないようであるが、家具や壁の傷、家具の数量などは入居時に気をつけてお互いに確認しておいた方がよい。できれば

写真で記録しておく。

カメルーンに限ったことではないだろうが、最後の段になり本性をむき出しにする人達も多いので、最後まで気をつけた方がよい。

- (5) 銀行口座の閉鎖
特段の問題はない。

15. 私財の輸送、引き取り、購入

15-1 家財道具

(1) 輸送業者

電気製品などを含む家財道具の輸送の方法は、キャリオンバゲッジおよびチェックインバゲッジ、航空別送、船便の3種類があるが、その費用を考慮した仕分けがむずかしい。若干記述が重複するところもあるが、それぞれ便利さも考えての仕分けをしてみると、次のとおりである。

バゲッジ——小型電気湯わかし、できれば小型炊飯器、米、はし、タッパ一、缶切り、紙皿、ポリ袋、果物ナイフ、塩、コショウの調味料、日本の海外向け放送の受信可能なラジオ、まな板の代用になるもの、台所用品の小物などがある。

航空別送——みそ、しょうゆ（粉末のものがある）、酢、化学調味料、だしの素類、日本めん類、小型変圧器、靴、衣類、化粧品類などがある。

船便——船便を使わずすべて航空別送にして、大きなもの、重いものではできるだけ現地調達するのも一案である。中古車両をコンテナで送る時には、車両とコンテナのすき間に家財道具を積むことができる。もちろん、運賃は特別に払うことはない。また、船便は物理的に傷みも少ないが、後述のようなアクシデントにあえば日数の長さによって、熱に弱い部品が溶けることがある。航空便の場合は、品傷みがかなりあり、食器類は細心の注意を要するが、船便の場合はそのまま届く。変質しない食品、衣類、靴、食器セット、鍋（特に圧力鍋は高地にあっては必需品で、硬い肉の料理にも役に立つ）、電子レンジ、包丁、砥石、すりばち、変圧器などは船便でもよい。

船便の場合は、日本の輸送業者はドアラ港までしか輸送しないので、現地の業者に税関での荷物引き取りとヤウンデまでの陸送を依頼することになる。

航空別送の場合は、ピックアップを借りて自分でヤウンデ空港まで引き取りに行くか、空港にたむろする小型トラックなどに運んでもらう。空港の倉庫内から倉庫入口まで運ぶのに、手押し車に労務者が何人も群がり、ひとり1,000 C F Aフランずつ要求する。倉庫入口で車に積むのにもまた、別の労務者が群がる。こんな時は、労務者の親分格に値段の交渉をしてから積む方がトラブルを避けられる。いずれにしても気分が悪くなること甚だしい。

(2) 輸入手続

B/L、インボイス、パッキングリスト、無税通関証明書を用意する。船便は業者に依頼するが、航空別送の場合は空港内の手続専門業者を使う。手数料は2万5,000 C F Aフランである。

家財道具の引き取り、車の引き取り、車の現地購入、J I C A携行機材の引き取りを無税とする場合には、勤務する関係官庁などから無税通関証明書の発給依頼を大蔵省に発出してもらい、その本文は税関に送られるので、写しを業者に渡して引き取りを頼む。無税通関証明書の発給依頼をする際に重要なことは、B/Lと品目リストを添えて依頼するのであるが、カバーノートには「別添 Personal Effectsと車両（車両名なども記入）についての無税通関」と明らか

にすることである。関係官庁など、あるいは大蔵省がPersonal Effectsとしたために車両が引き取れず再度車のための発給依頼をしなければならないことがある。税関は車両は身の回り品と認めない。無税通関証明書の取得は、相当有能で顔の広いカウンターパートと関係官庁と大蔵省を走り回っても、2ヵ月は必要である。書類が行方不明になったりすると、もっと月数がかかる。日本からの船便は順調にいけば約1ヵ月半であるが、ドアラ港でストライキがあったとか、シンガポールで積み替えそこなったとか、不慮の支障を邦人は経験させられている。こんなアクシデントで日数がかかると、積み荷の食料品はほとんど傷んでしまう。船便で送る荷物の内容も考慮したい。

(3) 家財道具の購入

当地で購入または家具付き住宅として借りるべきものは、居間用ソファ、ダイニングテーブルおよびいす、食器棚、冷蔵庫、クッカー、フリーザー、ベッドなどである。家具は、家具屋で注文して作ってもらう。電気製品は、街に何軒かあるスーパーと専門店で購入が可能である。

15-2 自動車

(1) 一般状況

道路事情が悪いのと防犯に若干でも役立たせるために、四輪駆動車が望ましい。

燃料の値段は、ガソリンは1リットル195CFAフランで、ジーゼル油は1リットル165CFAフランとあまり差がない。

(2) 輸入手続

日本から輸入あるいは送る時も、当地で新車を購入する時も、無税通関証明書が必要で相当期間を要する。

日本から中古車を送る時には、日本で行なった抹消登録証明書も必要なので留意すること。

(3) 任国での購入

ニッサン、トヨタ、三菱などの販売会社があり、ヤウンデのSumocaには日本人社長がいて三菱車を販売しているが、購入できるまで(車が届くまで)代替車の便宜をはかってもらえるだろう。中古車はいろいろむずかしいらしく、買った日本人はいまだいないようである。

(4) 自動車登録

自家用車の登録はいたって容易であり、またナンバープレートは登録所の外にたむろする業者から買う。JICAが供与した車両を専門家が主として使用するなどの場合には、政府所有の登録(CAナンバー)をしながら、私有の登録(CEナンバー)をもして、CEナンバープレートをつけることもできる。この時、3万CFAフラン程度を要求されるが、領収証は発行しない。このケースの利点は、政府所有車は保険、税金を免除されることである。政府所有登録のみの場合、大蔵省が召し上げて売って金に換えてしまうことがあることである。ダブル登録をしておけば、保険などの免除特権を利用しながら、政府が勝手に処分するのを避けることができる。

市内外のいたるところで警察が保険のチェックをしており、直前でUターンするタクシーをたびたびみかけるが、この時には政府登録証をみせれば、CEナンバーをつけていても問題はない。このような登録の仕方は、公用車の管理は責任ある者に行なわしめる必要があるところから生じたものであろう。

(5) 免許証取得

日本から国際免許証を持ってくれば、1年間はそれを使用し、適宜カメルーンの免許に切り替えることができる。国際免許証から当国の免許証への変更はいたって容易である。

(6) 保険、税金

政府所有車の場合を除き、必須である。

16. 社 交

16-1 風俗習慣

地方ごと、部族ごとに風俗習慣が異なり、ヤウンデ市内でも部族により居住地区ができていく場所もある。例えば、サッカーチームでも部族により編成されたりしている。邦人が現住民の風俗習慣に関係することはなく、まず赤ちゃんの誕生にお祝いを贈るくらいではなかろうか。招待された時、ちょっとした手土産にする小物をいくつか用意すれば、いざという時にあわてなくてすむ。

16-2 パーティでの留意点

邦人間のパーティぐらいのものだろう。フランス人達も独自の社会を作っており、あまり開放的でないようである。例えば、ゴルフ会員間を例にとっても、フランス人会員が帰国する時には、形のうえでは会員全体に開かれた送別コンペを催しなかなか盛んであるが、フランス人以外の参加者は事実上まれである。ただし、参加するとたいへん喜ばれ、大事にしてもらえ、フランス語の煩わしさを忘れて楽しめるのだが。

最近の社会状況から考えて、安全性の欠如から夜のパーティは遠慮した方がよい。

16-3 来客時の留意点

親しい邦人間で往来する程度で、現地の人や外国人との往来も改まった社交的なものはほとんどないので、特別に留意する点はない。近所の外国人をみていると、静かな暮らしをしているようである。

16-4 訪問時の留意点

特記することはないが、ただイスラム系の場合は宗教上でのさまざまな制約があるので、前もって生活習慣を知っておく必要がある。招く場合でも、食習慣が大きく違うので注意する。

16-5 禁止されている言動

特に禁止されている言動はないと考えられるし、反政府系の新聞は相当厳しい政府批判をしている。フランス植民地政策に対する批判は嫌がられる。また、秘密警察は存在するが、どのような活動をしているのかは明らかでない。つけ加えるなら、写真を撮られることを極度に嫌がる。宗教上のことと聞くが、現地の人に聞いてもはっきりした答えはないが、街頭でカメラを向けて群集に囲まれてリンチを受けたケースもあるので、必要のある時はお互いに納得してからにしたい。

17. 任国官公庁

次のような省がある。

Presidency of the Republic
Services Attached to the Presidency of the Republic
National Assembly
Prime Minister's Office
Economic and Social Council
External Relations
Territorial Administration
Justice
Defence
National Education
Youth and Sports
Information and Culture
Higher Education Computer Service and Scientific Research
Finance
Industrial and Commercial Development
Plan and Regional Development
Tourism
Agriculture
Livestock, Fisheries and Animal Industries
Mines, Water Resources and Power
Public Works and Transport
Town Planning and Housing
Public Health
Labour and Social Insurance
Social and Women's Affairs
Public Service and State Control
Internal Debt
State Intervention
Common Expenditure

なお、主要省は各州にDelegationをおいて、よく活動しているようである。

各省とも管理職が非常に多く、管理職が50%以上の省もある。したがって、書類の決裁は多くの個室を回らねばならず、この追跡は容易でなく多くの日月を要する。また、事業費の割合は20~30%で人件費が大部分を占める。

18. 在外日本関係機関など

在カメルーン日本大使館は、1991年 4月に設置された。

住 所 B.P. 6868, Yaounde

電 話 20-62-02

ファックス 20-62-03

テレックス 8992 KN

そのほか、ドアラにJETRO がある。

19. 地方都市

任国情報をご利用の皆様へ

この任国情報は、国際協力のために赴任されるJICA長期派遣専門家、JICA職員等の方々に、任国での生活上必要な最新の情報を提供する目的で作成されました。

本書の原データは国際協力総合研修所内のデータベースに蓄積されており、新しいデータが入手され次第、逐次更新できるシステムにしております。

現在までに、下記の国々について任国情報が整備されております。

なお、政府技術協力のために赴任するJICA役職員および派遣専門家は、技術協力協定や要請文書などの外交関係により、任国への入国および滞在にあたって特別の条件が付され、一定の義務が免除されるなどの特権が付与されています。本情報はこれらの条件に基づいた赴任マニュアルです。したがってご利用はJICAの用務による業務渡航者に限らせていただいております。

また、本情報は外国人専門家という特殊なステイタスによる生活ガイドであって、それぞれの国の人々の一般的な暮らしぶりを紹介するものではありません。各国の一般的な各種事情については、JICA図書館に多数資料をそろえておりますので合わせてご利用ください。

アジア地域

1. バングラディシュ
2. ブータン
3. ブルネイ
4. 中華人民共和国
5. インド
6. インドネシア
(ジャカルタ、バンドン、ジョジャカルタ、バダク)
7. 大韓民国
8. ラオス
9. マレーシア
10. ミャンマー
11. ネパール
12. パキスタン
13. フィリピン
14. シンガポール
15. スリ・ランカ
16. タイ (バンコク、チェンマイ、コンケン)

中近東地域

1. アルジェリア
2. バハレーン
3. エジプト
4. ジョルダン
5. クウェイト
6. モロッコ
7. オマーン
8. カタル
9. サウディ・アラビア
10. スーダン
11. シリア
12. テュニジア
13. トルコ (アタテ、イスタンブール)
14. アラブ首長国連邦 (ドバイ)
15. イエメン

太平洋地域

1. フィジー
2. キリバス
3. ミクロネシア
4. パラオ
5. バブア・ニューギニア
6. ソロモン
7. ヴァヌアツ
8. 西サモア

欧州地域

1. ボーランド

アフリカ地域

1. ブルンディ
2. カメルーン
3. コモロ
4. エチオピア
5. ガンビア
6. ガーナ
7. コートジボアール
8. ケニア
9. リベリア
10. マダガスカル (アタテ、アンタナナリボ、ディエゴ・スレバ)
11. マラウイ
12. モーリシャス
13. モザンビーク
14. ニジェール
15. ナイジェリア
16. ルワンダ
17. サントメ・プリンシペ
18. セネガル
19. セイシェル
20. ソマリア
21. タンザニア (ダルエスサラーム、ザンザibar)
22. トーゴ
23. ザイール
24. ザンビア
25. ジンバブエ

中南米地域

1. アルゼンティン
2. ボリヴィア (ラ・パス、サンタクルス)
3. ブラジル
(ブラジリア、サンパウロ、リオデジャネイロ、レシフェ、ポルトアレグレ、ベレン)
4. チリ
5. コロンビア
6. コスタ・リカ
7. ドミニカ共和国
8. エクアドル
9. グレナダ
10. グアテマラ
11. ホンデュラス
12. メキシコ
13. パナマ
14. パラグアイ (アスンシオン、エンカルナシオン)
15. ペルー
16. トリニダッド・トバゴ
17. ウルグアイ
18. ヴェネズエラ

任国情報コメント用紙

本書をより使い易いものとするために、皆様からの貴重なご意見（説明不足、間違え、誤字、脱字、ご要望など）をお待ちいたしております。ご記入に際しましては、任国情報に関するご指摘のみ具体的にご指摘くださるようお願いいたします。

[送付先] 〒162 東京都新宿区市谷本村町10-5
 国際協力センタービル
 国際協力事業団国際協力総合研修所
 技術情報課 任国情報係

国名		年度	年版
----	--	----	----

氏名		年齢	歳	性別	男・女
利用区分	所属(担当)部課名	指導科目	派遣期間		
JICA役職員					
JICA専門家等					
その他		(所属先)	(当該国での滞在期間)		
住所					
電話番号		日付	年	月	日

ページ	行	内 容

国 総 研 記 入 欄					
記事		技術情報課確認印			
		データベース修正処理	課長	代理	担当
		月 日	月 日	月 日	月 日

